

変換サンプル用テキスト

触がコート越しに伝わってきた。空はすでに群青色に染まり、街灯がぽつりぽつりと灯り始めていた。光の輪が地面に落ち、その中を小さな影が横切った。

猫だ。こちらを一瞥すると、まるで興味を失ったよう歩き去っていく。

「いいなあ、あなたは。待つ相手なんていなくても平気そうで」

猫は返事をしない。もちろん、してくれなくともいい。

やがて、足音が一つ、広場に響いた。規則正しく、急ぎすぎず、けれど確かにこちらへ向かってくる足音。顔を上げると、街灯の光の中に見慣れた姿が現れた。

「待たせてしまいましたね」

その声を聞いた瞬間、胸の奥に温かいものが広がった。寒さも、心細さも、すべてが溶けていくようだった。

「ううん。……来ててくれて、ありがとう」

言葉にした途端、ようやく本当に安心した気がした。相手は少し驚いたように目を瞬かせ、柔らかく笑つた。

自分でもおかしいと思う。けれど、来ると分かつただけで十分だった。

広場の端にあるベンチに腰を下ろすと、冷たい木の感

——その笑顔に、待っていた時間の全てが報われた。

夕暮れの風が、まだ冬の名残をわずかに含んでいた。駅前の広場には人影がまばらで、遠くから聞こえる電車のブレーキ音だけが、静かな空気を震わせている。

「本当に来るのかしら……」

思わず口にした言葉は、白い息となつて宙に溶けた。約束の時間まで、あと五分。

『待つ』という行為は、どうしてこうも心を落ち着かなくさせるのだろう。胸の奥がそわそわと波立ち、時計を見るたびに針が遅くなつたような錯覚に陥る。

ふと、ポケットの中でスマートフォンが震えた。画面には短いメッセージが一つ。

——少し遅れます。すぐ向かいます"

その一文を見た瞬間、胸の緊張がふつとほどけた。遅れると聞いて安心するなんて、

自分でもおかしいと思う。けれど、来ると分かつただけで十分だった。